

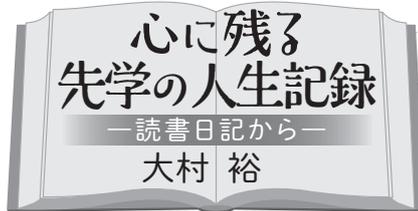
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.173
2018.2.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第2回

小島直記『極道-小説・郷誠之助』上下巻 (日経ビジネス人文庫 2012)

和島誠一の実父・郷誠之助(1865~1942)の伝記小説である。『男爵 郷誠之助君傳』(財団法人郷男爵記念會、1943年。本文840頁。巻頭・巻末に貴重な写真あり。以下「正伝」と略す)よりも数倍面白いので、こちらを取り上げる次第である。

和島誠一は、郷誠之助と和島カツとの間に生まれたことになっている(育ての母はその妹のヨシ)。郷は生涯正妻を持たず、家督は自身の弟の朔雄を養子として継がせている。誠之助に関する系図をみると(「正伝」13頁)、「庶子」として男女二人の名前が記されているが、誠一の名がない。また「正伝」巻末付載の誠之助葬儀の折の「遺族席」の写真にも、誠一と思われる人物は確認できない。和島は同年、中国山西省等の調査に出かけているが、それは8月から11月のことなので、葬儀に出られなかったはずはない。1933年に思想上の問題で検挙された経緯があるとはいえ、板橋区志村遺跡の発掘費用1000円を父に出資してもらおう代わりに、左翼運動はやめると約束しており、しかも郷の伝記刊行時点では、東京帝国大学人類学教室囑託の身分であったので、「世間」に出ることには、何ら問題はなかったはずなのに、この処遇は不思議である。それはともかく、本書の内容に入ろう。

郷誠之助は「快男子」である。そして惚れ惚れとするような男前である(「正伝」巻頭写真参照)。父は後年大蔵次官にして男爵の爵位も受けた郷純造。実母は彼の「女中」のふさ(純造と正妻との間には子供が生まれなかった)。幼少の頃、自分の出生の秘密を知った誠之助は、荒れにされる。3匹の犬を棒で殴り殺したり、近所の家に石を投げこんだり、屋根の引き窓にのぼって「女中」たちに小便をかけたり、ともかくやりたい放題である。学校に上がってもいたずらや乱暴はやまず、学校を転々とし、ついに宮城県の仙台中学校に落ち着く(13歳)。しかしここでも寄宿舎を抜け出して廊下を走る。挙句の果てに旅役者の少女との関係が新聞沙汰になってしまったので、学校当局もかばいきれず、放校処分となったのであった。東京に帰ってからも無頼な行動はやまない。あるとき、心胆を練るためと称して友人と無銭旅行を企てたのであるが、先立つもの(銭)がなければ一歩も進めるものではない。路銀に困った誠之助は一面識もなかった静岡県令の自宅に立ち寄り、父の名を持ち出して路銀を無心する。県令は快くお金を出してくれたものの、この事実をただちに父に知らせたため、父から勘当を言い渡されたのであった。

その後は、お人よしの義兄(純造の甥で彼の養子)から送金してもらいながら京都の同志社英語学校に学ぶが、その在学中に悪友に誘われて薬売りの行商(インチキ薬)を始めてしまう。結局、同志社は中

途でやめてしまったようである。帰京後、誠之助にとって生涯最大の事件が起こる。誠之助の隣家の中村のぶ子という1歳年下の女性と、かねてから恋仲となっていたのであるが、その女性が自殺してしまうのである。

この経緯はこうである。誠之助は、かの無銭旅行に旅立つ直前、「自分が立派な人間になるまで10年間待って欲しい」と申し出ると、のぶ子もそれを承諾していたのであるが、その3年後、のぶ子は年ごろとなり、彼女を預かっていた岩崎という叔父が、横浜の茂木商店の手代に嫁がせようとしたのである。誠之助は、ここに至ってのぶ子を岩崎家から「強奪」し、結婚しようとしたのであるが、岩崎の謀略にかかって、のぶ子は肥前大村の実家に帰されてしまったのであった。そして程なくしてのぶ子から長文の手紙が誠之助のもとに届く。そこには、「再び貴方にはお目にかかる機会はありません。妾(わたし)の命も長くはごさいません」(「正伝」138頁)と結んであったという。その手紙を出した直後、のぶ子は毒をあおいで死んでしまったのであった。郷は生涯妻を迎えることがなかったが、その原因はのぶ子への義理立てだろう噂されていたと、「正伝」にもある。きっとそうだと私も信じたい。誠一が複雑な家庭環境の中で苦悩したことは、まことに気の毒ではあったが、実父も血の涙を流すようなつらい目にあっていたのである(「正妻は亡きのぶ子」と決めていたのであろう)。

のぶ子が亡くなった半年後、この痛手をいやすためか誠之助は、ドイツ留学を決意する。しかしドイツでも放蕩三昧の5年間を過ごしてしまう(女性にもかなりもてたらしい)。これを伝え聞いた父親は帰国を迫るが、「何か身につけて帰らなければ父に合わせる顔がない」として、彼は博士の学位取得を思い立つ。しかし学位取得にあたっては、口頭試問を受けなければならない。教科は経済学・国際公法・政治学の三つ。試験官は9人の教授で、その中にはヘーゲルのお弟子さんというような学者もいた。そこで個人教授(パウケル)について猛勉強を始め、当時の主要な経済学者の著書をことごとく読破したのであった。かくてハイデルベルク大学より「ドクトル・フォン・フィロソフィー」の学位を受領して帰国の途につく。帰国後は持ち前の胆力・斬新な発想を駆使して倒産しかかった会社の再建を次々に成し遂げ、ついには推されて東京株式取引所の理事長等要職を歴任、財界の大御所となるのである。誠之助は息子の誠一にどんな思いを持っていたであろうか。自分に反発し続けていた誠一ではあったが、最後まで心にかけていたであろう。息子が東京帝国大学人類学選科生を修了したその2か月後にこの世を去ったのは、決して偶然とは思えないのである。

(参考文献:守屋幸一編『時代を拓いた男と女』板橋区立郷土資料館 2007年)

※巻頭連載は隔月です。今回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録—読書日記から—(第2回) 大村 裕 …1
■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡—女として考古学研究者として—(第22回) 岡田淳子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第166回) 中尾祐太 …3
■考古学者の書棚 「楽園考古学」 多賀茂治 …4

考古学の履歴書

過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(第22回) 岡田 淳子

②最期の現地調査 アネット島

アラスカ「州」の考古学者だった女性の友人が、「フレディーや淳子のようにならないうちに」と言って、仕事を辞めた。フレデリカ・デ・ラグーナと並べてもらったのは光栄だが、脚にはもう少し注意すべきだったと後悔している。

65歳で定年を迎えた私は左股関節術後のリハビリも終わり、まだ余力があったので、科研費を申請した。この度は、アラスカ東南部にあるアネット島のメトラカトラ・インディアン・コミュニティの調査である。この村は院生のころ岡正雄先生から「面白いところだから調査してみると良い」と指導を受けていた。同じ州内の調査を続けながらそのままになっていたの、発掘が出来なくなった今、良い機会と思い企画したものである。

1996年夏、就職の決まったゼミの女子学生たち4人を連れて予備調査に出かけた。シアトル空港で待ち合わせ、小型機を乗り継いで現地に入った学生たちは、前年のゼミで予備知識を得ていたためか、若さも手伝って驚くほど活気に満ちていた。調査地ではエルダー（長老）の人たちからも好まれ、十分に本調査の段取りをつけることができた。日本で初の「国際文化学部」になった北海道東海大学での教育が、機能していたことを実感した瞬間でもあった。

私は学部生のころから、考古学と同じ位に人類学・民族学に力を注いできた。双方の研究結果が、単なる借用に終わらず役立つことを考えたため、総合人類学の方向に向かっていた。

調査地のメトラカトラ村は、1887年にカナダ・ブリティッシュコロンビア州のメトラカトラから、自作の丸木舟を運んで移ってきたティムシアンによって作られた共同体で、英国からハドソン湾会社を足掛かりに、キリスト教の布教にやって来たW・ダンカン宣教師の指導によって成立したものである。それから100年、20世紀末には米国内でも最も成功したインディアン共同体の一つに成長した。その成功が何によってもたらされたものかを把握することは、人類社会の今後の発展にとっても意義あるものと考えていた。

しかも、この村の成功は日本人と無関係ではなく、極洋や住友林業などの会社がかかわってノウハウを与えている。日本人が利益を得るだけでなく、技術を惜しみなく与えたこと、村の人々がそれを活かす力を持っていたこと、両者の精神的・技術的能力によるところが大きい。(M・インディアン・コミュニティの歩んだ道 2013年参照)

ダンカン神父はキリスト教の布教だけではなく、先住民が自立して生きられる方法を探った。林業・製紙業と漁業・水産業を基幹産業として働く意欲を持たせ、



▲1892年に建てられたダンカン記念教会(1989年撮影)

ヨーロッパ流の教育を授けることに努力を惜しかなかった。私が調査した20世紀末には、20年間、島でコミュニティーのために働いたものは、老後の生活から最後の看取りまで保障され、人々は安心して生涯を終えることが出来るようになっていた。

義務教育以後の上級学校進学は毎年95%前後、自前のもも含め国や州、法人・団体・企業など、さまざまな奨学金によって、進学の学費と生活費が与えられる。それでも上手く行かなかった者は、夏休みに村の企業（水産工場）でアルバイトをして補足する。一生のうちに一度は島の外の暮らしを体験する素晴らしい仕組みでもあった。また、若者の中には卒業してパートナーとともに島に戻るものが多く、これがハイブリッド社会を可能にし、外とつながるのに役立っていた。

村民1800人ほどの小さな村に教会が8箇所もあり、キリスト教に支えられていると同時に、母系制の四つのクラン（氏族）による先住民文化にも支えられていた。小学生のときからデザイン芸術に力を入れ、大型彫刻の技術や、民族衣装の製作にも余念がない。村議会の議員は男女ほぼ同数、女性が発案し男性が実行に移すことが多く知られている。アラスカ唯一のインディアン・リザーベーションとして、BIA（インディアン保護局）の下に自治組織をもっており、警察や消防は州のあり方に従い、郵便局・銀行は島内に支店を置いて現代的な生活も満喫していた。

10年ほど前にアラスカ大学東南校の学生が私たちの調査地で考古学の実習をした時、メトラカトラ村出身者が参加していて、島内で遺跡を探していた。彼は早速、それと思われる地点に私を誘ってくれたが、残念ながら波によって作られた自然の貝層で遺跡とは考えられなかった。この島には、古くから人は住んでいなかったのかも知れない。

私はここで、お詫びのお知らせをしなければならない。アルカ通信163号に載せた「大学構内の遺跡調査を手伝う」では土器片の散らばりと接合関係を調査結果の一つのポイントとして記した。遺跡の事実記載についてはその通りであるが、研究結果を出したのは調査の直接の責任者だった横山英介氏であった。長年考古学の研究を続けてきた、れっきとした考古学者によるものであったことを記してお詫びを申し上げる。住居と出土土器の関係については、関係が掴みづらく苦慮することが多いので、この結果はそれを知るための研究として高く評価されるであろう。

略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町（現渋谷区初台）に生まれる
1949年	東京都立第五高等女学校 卒（学制改正）
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科（考古学） 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科（人類学）修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科（史学）博士単位取得
1961～64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員（常勤臨時職員）
1964～66年	米国ウイスコンシン大学人類学部 研究員
1967～77年	国立（クニタチ）音楽大学 専任教員
1978～88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988～2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員（1998年より特任）
2010～2017年	北海道立北方民族博物館 館長（非常勤）

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁葦子先生です。

U レーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 166

箱崎遺跡 ～福岡県福岡市～

中尾 祐太

福岡市の北側に広がる博多湾沿岸には箱崎砂層と呼称される新砂丘砂層が堆積している。この砂丘は遅くとも縄文時代の晩期には形成されたと考えられており、砂丘の東限、西限は現在の福岡市域とほぼ重複している。本砂丘は鞍部や旧河川に分断されつつ、それぞれに微高地を形成しており、微高地上には姪浜遺跡、西新遺跡、藤崎遺跡、博多遺跡群、堅粕遺跡などが点在している。今回紹介する箱崎遺跡も同砂丘上に立地し、上記の遺跡のなかで最も北側に位置する。1983年に地下鉄延伸工事に先立ち実施された発掘調査を嚆矢として、各種開発に伴い調査が実施されてきた。特に、近年における調査事例は飛躍的にのび、2017年現在での調査次数は80次を数え、市内を代表する遺跡となりつつある。

箱崎遺跡は福岡市東区に所在する集落遺跡である。弥生時代には散発的ながらも遺構が営まれるようになり、古墳時代になると本格的な集落が形成される。集落は遺跡北側の居住域と南部の墓域からなり、中期～後期に比定される古墳も確認されている。ところが古墳造営を最後に生活の痕跡は認められず、一帯の土地利用は数世紀にわたって放棄される。再び遺構が出現するのは10世紀前半である。箱崎宮の創建は延長元(923)年とされており、時期的に符号することから、集落の出現と発展には同宮が深く関与していると推定される。中世になると、博多湾沿岸地域に所在する博多遺跡群が立地的な環境をいかし、日本屈指の貿易拠点として繁栄する。その余波は近接する箱崎遺跡にも及び、遺跡からは豊富な量の輸入陶磁器が出土する。その数は市内における他の遺跡と比較しても膨大であり、単なる一大消費地であるだけでなく、博多を補完する役割を担っていたことは容易に想定できる。集落の構成要因には宮関係者はもちろん、出土遺物から宋人(貿易商人)なども想定できる他、遺跡の一面では鋳造関連遺物やガラス埴塼が集中していることから、生産工房があったことも分かっている。遺構密度も極めて密であり、以上を総合的に判断すると、周辺で有数の「都市」であったと考えられる。

私が、はじめて箱崎遺跡にふれたのは福岡市に入庁して2年目の4月のことであった。1年目は先輩職員の指導のもと2人体制で調査を実施していたが、1人で調査を担当するようになってまもなく調査したのが箱崎遺跡である。決まった時点で知っていたのは名前程度。どんな遺構・遺物が出るのか全く知らず、上司・先輩に聞いて回ったのを覚えている。色々いただいた助言のなかから最も多かった答えを、一人の先輩の言葉を借りると「まあ、博多みたいなものだ。」であった。博多とは上記の博多遺跡群のことである。

砂丘上に立地しており、輸入陶磁器他の中世の遺物が多量に出土するということを表しているのであるが、その答えに非常に困惑した。それまでにも、多くの調査現場に様々な立場でかかわってはいたが、砂丘ははじめて、中世もはじめてであり、なにより基準の博多が分からない。博多遺跡群は日々各種の開発が行われている都市部に位置することから、調査事例が多く、福岡市における中世遺跡の登竜門ともなっている。しかし、この時点で博多の調査はみたことがあったが、関わったことはなかった。途方に暮れつつ、まず陶磁器の勉強をした。幸い整理作業を行う事務所に調査で出土した土器が多数あり、博多遺跡群で出土した陶磁器もかなりの数があったため、報告書や論文をみながら、また、先輩に聞きながら遺物をみたのを覚えている。完形ともなれば、何となくは理解できたが、困ったのは破片資料である。「これは白いから白磁でこれが青磁。青白いこれが青白磁か。」自慢げに先輩に聞くと、「それは白磁だ。」の答え。こんな状況のまま調査着手、「遺物はともかく調査は何とか。」と挑んだものの、はじめての砂丘遺跡で要領を得ず、遺構のそばを歩き壊した遺構の肩は数知れず。何とか現場は終了したが、反省点は多く、機会があれば次こそはと誓った。

ところが、リベンジの機会は意外に早く、調査終了後一ヶ月あまりで再び調査をする機会を得た。初めての調査の時とは違い、多少の知識は蓄えていたし、前回の経験も活かすことで、それなりに調査はこなすことができた。2回目の調査終了後、次年度の整理作業にむけて図面の整理をしていたところ、さらに同年度中にさらにもう1地点の調査の担当をすることが決まった。さすがに「またですか。」と声がかたが、本心は楽しみであった。また、それとほぼ同時に箱崎遺跡についてまとめて報告する機会もいただいた。これを期に、調査も箱崎、整理も箱崎、研究も箱崎の箱崎三昧の日々がはじまった。2017年12月現在も継続中で、今年度刊行予定の報告書作成の真っ最中である。

箱崎遺跡と私の関わりは以上のとおりであるが、箱崎遺跡の発掘調査をはじめ担当してからまだ3年しかたっておらず、そもそも文化財行政に携わるようになってからの日も浅く、主体的にかかわった遺跡も決して多くはない。ただ、その中でもこれほど時間をそそいだ遺跡はなく、今の時点での一番の遺跡であると断言できるし、今後も変わることはないと思う。なにより遺跡の全体をまとめたことで、多くの研究上の課題も見えてきた。箱崎遺跡の追及は今後のライフワークの一つとして取り組んでいきたい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは秋田雄也さんです。

考古学者の書棚

「楽園考古学」

篠遠喜彦・荒俣宏／平凡社(1993)

多賀 茂治

この秋、新聞に掲載された追悼文で篠遠喜彦氏が93歳で亡くなられたことを知った。改めて紹介するまでもないが、ハワイのビショップ博物館に籍を置き、ポリネシア考古学の研究で活躍された方である。

私が篠遠氏の名前を知ってからもう30年以上になる。学生時代、古代の釣針について調べる機会があり、論文にあげられた参考文献でShinotoという名前を目にした。英文の文献だったので原典にまであたることはなく、最初はてっきり「シノト」という外国の考古学者だと思い込んでいた。その方が日本人の篠遠喜彦氏であると知った時、ポリネシアの研究をしている日本人考古学者がいることに驚きと感動を覚えたことを記憶している。

思い返せば、ポリネシアにかすかな関心を抱いたのは小学生の頃であった。「世界の七不思議」みたいなタイトルの子ども向け書籍で、イースター島のモアイ像を見たのが初めてのポリネシア体験だった。その説明の中でハイエルダールがコンティキ号で南米からポリネシアへの渡航に挑んだ冒険譚も紹介されていたように思う。

ただこの頃はポリネシアが世界のどこにあるのかも知らず、その関心も長続きはしなかった。その後はポリネシアといえば、観光地としてハワイやタヒチを知っていたくらいで、特に関心を抱く対象ではなかった。再びポリネシアのことに関心が及ぶようになったのは、大学生の時に古代の海人に興味を抱いてからである。航海や漁労のことを調べているうちに、冒頭に述べた篠遠氏とのかすかな出会いがあり、以来ポリネシアのことが心にひっかかり続けている。

さて私のポリネシア体験の話はこれくらいにして篠遠喜彦氏のことに戻ろう。氏の人柄やポリネシア考古学の魅力を知る上で最良の書が、今回紹介する「楽園考古学」である。この本はポリネシアに関心が深く、篠遠氏のもとを度々訪れるようになった作家荒俣宏氏が、篠遠氏の波瀾万丈の半生や研究の軌跡についてインタビューしたものである。20年以上前の1993年の出版であるが、今読み返してもワクワクさせられる。タイトルから漂うゆるい雰囲気とは裏腹に、荒俣氏の巧みな導きによって篠遠氏が語るのは「楽園」の過去と現在、そして未来について考えさせられる深い話である。

篠遠氏の話は第1章のイースター島にまつわる話から始まる。ポリネシアで最も考古学的に著名なイースター島を導入とするのは、ポリネシア考古学に縁のない読者が入ってきやすいようにという荒俣氏の配慮であろう。しかし有名なモアイ像のことなどイースター島の考古学調査について語られる冒頭から、物質文化の編年研究の重要性や、島全体をひとつの遺跡として保護することの必要性など、篠遠氏の学問研究に対する基本姿勢が熱く語られ、ポリネシア考古学の世界へと引き込まれていく。

そんな篠遠氏がポリネシア考古学と出会ったのは、考古学を学ぶためにアメリカの大学へ向かう途中ハワイに立ち寄ったのがきっかけであった。第2章ではその経緯が青年時代の戦争体験など様々なエピソードを交えながら語られる。氏がポリネシア考古学に出会ったのは偶然の要素も多々あるが、少年時代からの純粋な探究心が人との出会いを生み、氏をポリネシアへと導いていったのだと感じさせられる。

ハワイに落ち着いた氏はハワイ大学でポリネシア考古学に本格的に取り組み、釣針編年を基準としてポリネシア文化の枠組みを明らかにしていく。第3章ではその過程が語られるが、氏の研究姿勢は出土資料を第一にする基本に忠実なものであり、時代や研究対象が変わっても考古学研究の原点はここにあると改めて認識させられる。

そして氏はハワイを拠点に、マルケサス諸島などで多くの遺跡の発掘調査を行い、新たな発見を積み重ねていく。第4章から第6章では各島での発掘調査の成果や現地の人々との関わりについて語られる。氏は単に研究のために遺跡を調査するだけではなく、フアヒネ島での文化遺産の保存と自然環境の保護など、伝統的な生活から離れていく現地の人々のアイデンティティのより所として調査成果を活かすことにも精力的に取り組んでいく。発掘調査が遺跡の破壊を伴うものである以上、調査の成果を何かの形で現地に残すことの大切さについては我々もよく口にするが、篠遠氏の活動からその実践には長い時間と多大なエネルギーが必要なことを痛感させられる。

最終の第7章「楽園の実際」では、美しい自然や素朴な人々と出会える楽園に存在する過酷な自然環境や植民地としての歴史など重い現実が語られる。信仰遺跡であるヘイアウの復元を巡る現地の人々との思いのズレについて語った後の、「いったい楽園とは何を指すのかと考えてしまいました。」という氏の最後の言葉は重い。

ポリネシアは私たちにとって遠い存在であり、本書で語られる篠遠氏の経験も遠い過去となりつつあるかもしれないが、考古学という地域や時代を超えることができる窓から眺めてみると、そこに見えてくるものは決して別の世界の話ではないことに気づかされる。何のために、誰のために遺跡の調査をしているのか？そんな疑問をいただいたら、ポリネシア考古学に興味のある人もない人も、日常を相対化し現在そして未来について考えるきっかけとして本書を一読することをおすすめしたい。

アルカ通信 No.173

発行日 2018年2月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp